

キャリアデザイン学部新生オリエンテーション講演：孤立と自己責任の社会からつながりと共同の社会へ

湯浅, 誠

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

109

(終了ページ / End Page)

121

(発行年 / Year)

2011-02

キャリアデザイン学部新入生オリエンテーション講演

孤立と自己責任の社会からつながりと共同の社会へ

NPO 自立生活サポートセンターもやい事務局長、反貧困ネットワーク事務局長、
内閣府参与・緊急雇用対策本部貧困・困窮者支援チーム事務局長
湯浅 誠

開催日：2010年4月24日（土） 13：00～14：00

場 所：法政大学 市ヶ谷キャンパス外濠校舎 S305

日本における貧困——現実を見据える

入学おめでとうございます。湯浅と申します。今日は一時間ほど話をさせていただきます。最初に断っておくと、今日の私の話は、あまり楽しい話ではありません。入学したての明るいみなさんに聞かせるのは、心苦しいような話で、日本における貧困という話になります。ただ、貧困の話というのは、辛くてあまり明るくない話ではあるのですが、しかしそういう現実を見据えておくことは、結構大事なことだと私は思っているのです。というのは、まやかしの希望みたいな、夢みたいなのは、たくさんでしょう。ですから、もうちょっと本当のことは見ようというふうに感じています。歴史で学んだかもしれませんが、18世紀の啓蒙思想家にヴォルテールというフランス人がいて、彼は「希望は絶望の後にある」と言ったそうです。私、これが結構好きな言葉で覚えているのです。

いろいろこうしたらいい、ああしたらいい

という話がありますが、実際はもうちょっと複雑だったり、厄介だったりしていて、でも、そういう複雑さや厄介さを踏まえて、これからの大学生活や人生を送っていただければということで、私の方から話をさせていただきます。

何に注目するのか

まず、貧困の問題はどういう問題かといいますと、椅子取りゲームを考えると分かりやすいと思うのです。みなさん、椅子取りゲーム、ご存知ですよね。10人の人に対して8つの椅子があり、音楽が鳴っている間ぐるぐる回りを回って、止まったところで座る、あれですね。あの時に、大事なものは「何に注目するか」ということです。

「座れなかった人に注目する」という見方があります。10人で8つの椅子しかなかったら、2人は座れません。その時に、「この2人はなぜ、椅子に座れなかったのだろう」

と問いを立てるわけです。そしてその2人が座れなかったという結果から始めてその原因を探す。そうすると、なにかしら必ず原因が見つかるのです。

たとえば、この人たちはちゃんと音楽聞いていなかったねとか、ぼーっとしていたからだとか、普段から鍛錬が足りないのだとか、おしゃべりしているからだとか、朝飯食ってこないからだとか、太り過ぎだとか。そういうことは何かしら見つかるわけです。なぜならば、座れなかったという結果がすでにそこにあるわけなので、その原因を何か探そうとすると、しかも完璧な人は誰もいませんから、何か見つかる。その時に、みんなこう言うわけです。「だから、あんたは座れないんだ」と。「座れるようになりたかったら、もうちょっと自分で注意深くなるとか、痩せるとか、練習するとか、そういうことをやって、出直してきなさい」と。その時には、つまり、座れないのは、あんたの問題だよということですね。

ですが、他方で「椅子に注目する」見方というのがあります。椅子に注目すると、どういう結果が見えてくるかということ、10人に対して8つしか椅子はないので、2人は座れない。それは椅子が8つしかない以上当たり前だろうという話になるのです。この10人がどれだけすごい10人でもです。たとえばこの10人が全員イチローだったとしても、2人のイチローが座れない。となると、この2人がどうこうという前に、椅子の数の問題だなという話になるわけです。

この、どっちの見方に立つかで、結論が全く違ってきてしまいます。貧困の問題というのはいつも、この、どっちの見方に立つかという話なのです。その間で、「こっちの見方が正しいんだ」、「いやこっちの見方が正しい

んだ」という人たちが綱引きしているというふうイメージすると、わかりやすいのではないかと思います。

「椅子に座れなかった人」に注目する見方をすれば、本人がもっと努力すればいいんだという話になります。

だけど、「椅子の数」に注目する見方をすれば、椅子の数が足りないんだという話になるので、改善策が全然変わってきてしまう。

みなさんは、どういう見方をしますかということです。あるいは、みなさんがプレイヤーなら、どういう椅子取りゲームがしたいですか。私はこう思っています。「座れなかった人」に注目して原因を探せば、それは必ず原因が見つかる。でも、それでは問題の解決にはならない。もし、その人たちが座れるようになって、誰か2人は落ちてしまうから。だとすると、この8つの椅子を増やす必要がある。もし、増やせないのだったら、ルールを変えたらどうか。たとえば、1つの椅子に2人座ってもいいというルールにしたらどうか。あるいは、地面に座ってもいいというルールにしたらどうか。あるいは、2人も3人も座れる椅子を作るとかということをやったらどうかということです。

自己責任論の日本社会

でも、なかなかそういう発想にはいかない場合が多いです。日本の社会は基本的に、「座れなかった人」に注目する社会だったと私は思っています。もうちょっと頑張れば座れたはずなのに、だから、本人の努力が足りないのだ、と言って片づけてしまう。これを自己責任論といいます。その自己責任論で片づけてきた結果、だんだん何が起こってきたかということ、椅子の数が減っていったしまったの

です。「生活できる」という椅子、あるいは「働ける」という椅子、あるいは「正規雇用」という椅子、椅子にはいろんなものがあるのですけれども、そういう椅子が減っていつてしまったわけです。

今、日本の貧困率というのは、15.7%となっていて、去年10月に政府が発表したのですが、アメリカに次いで高いのです。こういう話をすると、グローバルゼーションなのだからしょうがないとか、資本主義社会には必ず貧富の差が生まれるのだとか、そういう人がいるのですけれども、同じ資本主義社会でも、同じグローバルゼーションの波をかぶっている国々の間でも、貧困率は、当たり前ですが違います。そういう意味では、今の日本の状態が、しょうがない、やむを得ないのだというふうには、言えないのです。

たとえば、同じ基準で当てはめた時に、デンマークの貧困率は4.1%です。日本はその3倍以上です。だとすると、それはデンマークだって資本主義国だし、サブプライムローン・ショックの影響を受け、リーマン・ショックの影響を受けているわけですから、何が違うんだって話になるわけで、その違いを見つけないと意味がない、解決はできないと思ってください。

だけど、なかなかそういうことは、見てもらえなかった。わかりにくいから。座れなかった人の努力が足りなかったと考えた方がシンプルなのです。わかりやすい。スッキリする。簡単なのです。

特に、何かの時に上手くいった側の人は、そう思いたい。たとえば、みなさんこの大学に受験して、さっき聞いたものすごい倍率だったのですが、合格した人たちなのです。高い競争を生き残ってきたわけです。となると、自分がなぜ受かったのかとい

う話になると、多くの場合は、自分が一生懸命受験勉強を頑張ったからだと思いたいわけです。私、東大卒ですが、自分が大学受かった時もそう思っていました。「オレ、一生懸命受験勉強したからな」と。「いろいろ誘惑あったけど、耐えたしな」というふうに思っていた。だけど、当たり前ですが、ここにずらっと並んでいる皆さんの中でも、それまでやってきた勉強量、あるいは努力の量というのは、まちまちなわけです。ものすごく努力して、なんとかかかんとか入ったという人もいれば、あまり努力せずに入れたという人もいます。それと同じように、みなさんと同じ努力をしても、入れなかった人はいるわけです。それは、運がなかったのか、能力が足りなかったのか、いろんな要因が絡んでいるのでしょうが、そういうことの中に、たとえば貧困の問題というのが絡んでいます。

ひとことで言って、たとえば私には、自分が一人で勉強できる勉強部屋が与えられていたわけです。中学校ぐらいから。そうすると、私は自分が勉強したいときに部屋に戻れば、自分のしたいだけ勉強できた。それを邪魔する人はいませんでした。たまに母親が来たりするけれど。しかし、世の中には、家族そろって、一部屋、二部屋しかないという人がいます。そうすると、お父ちゃんがテレビ見ている横で勉強しなければいけなかったりするわけです。弟や妹が走り回っている中で勉強しなければならないのです。その人はあまり集中できなくて、同じ分勉強しても、同じ成果を上げられない。同じ能力を持っていても、同じ分の努力では、同じ基準に行かないので、個室の勉強部屋持っている人の1.5倍なのか2倍なのか3倍なのかわからないけれど、それだけの努力をしないといけない。

また、塾に行くことのできる人と、親がそこまでお金がないというので、行くことのできない人がいるわけです。その時点で有利不利というのはできてしまうわけです。

となると、椅子取りゲームの椅子に対してみんなが同じ距離で回っているわけではない。ある人たちは、椅子のすぐそばを回っていて、ある人たちは椅子の遠くを回っている。でも、音楽が止まった途端に、ワッと一斉に座って、その座るときは、先に座った者が勝ち。その時に、先に座った人たちがこういうわけです。「座れなかったヤツは努力が足りないんだ。オレはちゃんとやってきたから座れた。お前らはちゃんとやって来なかったから、座れなかった」というふうに、しばしば自分を正当化したい。自分の今のこの結果は、上手く行っている時は、自分の努力の結果であると思いたいということがありますから、多くの人たちはそう思います。それで、取って返して、「だからお前ができないのは、君の努力が足りないからだ」というふうに思いたい。そうじゃないと、自分が救われないから。

だけど実際には、親の年収を横軸に取って、子どもの大学進学率を縦軸にとると、きれいな正比例を描きます。親の収入が高ければ高いほど、子どもの大学進学率は高くなる。親の収入が低ければ低いほど、子どもの大学進学率は低い。もちろん、貧乏な家庭に生まれても、ものすごく努力して、この大学に入った人もいますでしょう。だけど確率的には、低くなってしまいます。他の人と同じような努力では到達できないということになります。

競争主義的な社会

ですから、貧困の問題というのは、そうい

う意味で、努力の量には還元できないのです。だけど、先ほど言ったように、社会的には「本人がもうちょっと頑張ればいいんだよ」と、ずっと言われ続けています。この3年くらいで大分変りましたが、それでもまだそう言われ続けていて、その人たちは、あるいは、そうではない人も、「なんとか自分だけは生き残ろう」と思うのです。親もそれを子どもに期待します。「世の中、厳しいんだから、どんな時代になっても生き残っていけるように、気抜いちゃいかんよ」とか、「手に職をつけて、資格を取って、そうやってどんな時代になっても生き残れるようにするんですよ」というふうに言われたことはないですか。どうしてもそういう発想になる。世の中が厳しければ厳しいほど、実は競争主義的になります。折れる人が増えていけばいくほど、自分はあるならないようにというように、頑張るのです。そうやって、だんだん塾通いが低年齢化していったり、受験競争が厳しくなったりしていくわけです。

4年か5年くらい前からは、ワーキングプアというようなことが言われるようになってきました。みなさんにとってはもう、よく聞く言葉の部類に入っているかもしれませんが、この言葉がよく使われるようになってきたのは、5年くらい前からですから、5年前に同じこの教室で「ワーキングプアという言葉を知っていますか」と聞いても、知っている人は殆どいなかったはずでした。だけど、今はそれくらい一般的になってきてしまった。ワーキングプアって、いろんな定義がありますけれども、一つの定義は、一年間通じて働いているのだけれども、年収が200万円未満だという人のことを指すと言われています。一年間通じて働いても年収が200万円いかない人が、今の日本社会では1067万人いると

いう、これは総務省の統計です。働いている人はだいたい5千万人くらいですから、21%かな。4~5人に1人は、一年間通じて働いても200万円にいきません。

そういうふうになってくると、そうならないように努力しようと思うわけです。そうすると、だんだんだんだん、世知辛くなっていくわけです。世知辛さというのは、いろんなところに現われるのですが、たとえば、競争が激しくなってきましたから、少ない椅子を奪い合うことになります。椅子は、8つではなくて、7つ、6つ、5つと減っていく。そうすると、たとえば職場で、自分が知っていることは人には教えない、同僚には教えない、ということを書きます。なぜ教えないかという、そいつは教えた結果できるようになってしまうと、自分が干されてしまうかもしれない。自分が「お前なんか知らない」と言われるかもしれない。みんながある程度生き残れると思っていれば、知識を共有したりして、お互いに一緒にいい仕事をやろうねという話もできるかもしれないが、アンタかオレか、どっちかしか残れないという話になると、「アンタには教えない」ということになる。そうすると、自分の横にいる人がいなくなっていくのです。人は常に自分の上か、あるいは自分の下にいる。そうなると、縦一直線の社会で、周りはみんな自分より優れているか、自分より劣っているか、そのどっちかで、自分の仲間はいないということになる。

それでさっきの話がそのまま出てくると、自分より優れている、自分より劣っているというこの序列は、努力や能力に還元されていきますから、だから自分より上にいる人は自分より優れた人、自分より下にいる人は、自分より劣った人となる。だから自分より下にいる人は、「コイツらみんな、努力が足りな

い」。でも、自分は、上の人から常に「お前はまだ努力が足りない」と言われ続ける、という構造になります。常に誰かから、「お前はまだまだだ」と言われ、「努力が足りない」と言われ、常に誰かに対して「お前なんかまだまだだ」、「努力が足りない」と言い続けている、そういう社会になってしまう。

日本における「子どもの貧困」と自殺率

そういう社会というのは、生きやすくありません。生きやすすくないので、どういうふうになるかということ、大人だけではなくて、子どももそういう感覚を持って、社会を見るようになります。

次の表は、2007年に発表されたユニセフ、国際機関の調査です。「子どもの貧困」について、物質的な貧困、心の貧困、その両面から調査したものの一部です。問いは、「さみしい」、「居場所がない」というふうに感じますかということに対して、「はい」と答えた子どもの率（「孤独感を持つこどもの比率」、「場違い感を持つこどもの率」）をあげてあります。

アメリカの数字は載っていません。ですが、ずらっと、いわゆる先進国が並んでいます。イギリス、スイス、スウェーデン、スペイン、ポルトガル、ポーランド、ノルウェー、ニュージーランド、オランダ、日本。見ていただくと、「さみしい」と「居場所がない」という子どもの数がダントツですね。ちょっと変な感じがしませんか。日本の子どもは、さみしん坊のDNAを持って生まれてくるのか。そうではないわけです。赤ん坊として親から生まれてくるその状態は、日本に生まれた赤ん坊も、フランスやドイツに生まれた赤ん坊も基本的には変わらないはずで

国	孤独感を持つ こどもの比率	場違い感を持つ こどもの比率
デンマーク	6.2	11.8
フィンランド	6.2	8.4
ノルウェー	7.0	9.1
スウェーデン	6.7	4.9
オランダ	2.9	6.9
ベルギー	6.4	15.6
ドイツ	6.2	11.4
フランス	6.4	12.3
オーストリア	7.2	8.2
ギリシャ	6.5	8.3
イタリア	6.0	6.2
ポルトガル	5.0	11.7
スペイン	4.4	8.9
アイルランド	4.6	7.8
イギリス連邦	5.4	8.7
アメリカ合衆国	—	—
日本	29.8	18.1

(UNICEF : Child poverty in perspective: An overview of child well-being in rich countries.2007)

ではなぜ、世の中にさらされもしない子どもの時に、こんなに差がついてしまうのか。どこか、おかしいと、私は思うのです。どこかおかしくなければ、こんなにクッキリとした違いが生まれるはずがない。だいたい、どこの国も似たり寄ったりではないですか。なぜ、日本だけダントツに飛びぬけているのか。

同じようなことが自殺の問題についても言えます。日本の若者の20代、30代の死因のトップは自殺です。死因のトップは、交通事故ではなく、病気でもなく、自殺です。日本の自殺率は、世界第8位です。人口1千人に占める自殺者の割合というのは、3.3人。日本より上にどんな国があるかという、リトアニア、エストニア、ベラルーシ、ロシア、ハンガリー、ブルガリア。共通しているの

は、旧ソ連圏です。ソ連崩壊後に独立した国々で、経済的にはかなり厳しい国が多いです。もう一つの共通点は、とても緯度が高い国々です。なので、冬が長い。そして冬の間は、夜が長いという特徴があります。

日本は、振わなくなったとはいえ、世界第2位とか第3位とか第5位とか言われる経済大国。しかも、気候は温暖湿潤で、世界的にみて、非常に過ごしやすい国だと言われているわけです。にもかかわらず、なぜそんなに自殺者が多いのか。なぜ世界第8位なのかということになると、これまた、なにかおかしいのです。緯度や経済力以外の要因が影響しているわけです。そういうふうに考えてくると、広く世界に目をむけると、日本のおかしさというのが見えてきます。根性論では片付かないというのがわかってくる。その根性論で片付かない部分をどう考えるのか。これが貧困の問題です。

貧困と「溜め」

貧困の問題というのは、どういうふうに考えればいいか。私は「溜め」ということを言っています。「溜め」というのは、さんずいに留まると書くのですが、溜池の溜ですね。これは、イメージとしては、自分を守ってくれるバリアーみたいなものです。

たとえば、お金がいっぱいあるというのは、金銭的な「溜め」があるということと言えます。人間関係、頼れる家族がいる、頼れる友人がいる、相談できる友人がいる、こういうのは人間関係の「溜め」があるということです。「オレは頑張れる」、「やれる」、「チャレンジできる」、「やれそうな気がする」、そういう気持ちになれるのは、精神的な「溜め」があるということなのです。

「溜め」というのは、そういう金銭的、人

間関係的、精神的、そういういろんな要素を含んでいて、それが全体として「溜め」というふうにして自分を守ってくれるバリアーみたいなものです。貧困というのは、その全体としての「溜め」が失われていってしまうことというふうに私は言っているのです。

何が言いたいかということ、まず一つは、貧困というのはお金だけの問題ではないと言うことです。たとえば、みなさんの中には実家から通われている方もいれば、一人暮らししている人もいるでしょう。皆さんの中では、実家暮らしの人が多く聞きます。そうすると、たとえば自分の収入が15万円あったとすれば、実家に住んでいる人は15万円あればかなり余裕があります。だけど一人暮らしをしている人は、その15万円で全部やろうとしたら、家賃、光熱費、食費、なんだかんだとかかかっていきますから、あまり余裕がない。ちょっとキツイかもしれない。金額は同じでも、囲まれている状況によって、全然違ってきます。だから、貧困というのは、お金だけの問題ではない。人間関係、そういう頼れる親がいるとか、実家に住める親がいるとか、そういうのがあるかないかによって、持つお金の意味が変わってきます。これは、同じ一人暮らしをしている人たちの間でも違ってきます。

私は、2003年に大学院を追い出されたのですけれども、それで、どうしようかなと思って、ちょうどホームレス支援をやっていたから、野宿の人たちと一緒に仕事起こしを始めました。そして便利屋さんをやっていました。その時は、しばらくは月収10万円ぐらいでした。一人暮らししていましたから、生活はかなりキツかった。だけど、「なんとかなるさ」と思っていました。その時は、別にあまり深く考えませんでした

が、後になって考えてみると、なぜあの時に、なんとかなるさと思えていたかということ、それはたぶん、本当にどうしようもなくなったら、実家に帰ればいいやと思っていました。私の実家は東京の郊外にありまして、無理すれば、そこから東京の都心まで通えなくもないのです、頑張れば。なので、私には、そういう実家というセーフティネットがあった。そうすると、人はちょっと大胆なことができるわけです。いざ、なんか上手いかななくなっても、まあ、本当にどうにもならなくなってしまうということはないというふうに思えるから、踏み切れる。ところが、本当にイザとなっても、誰も頼れる人がいないという人の月収10万円は、私よりはるかにキツかったはず。これが厳しくなったら、もう自分には後がない。アパート代払えなくなったら、本当にホームレスになるしかない。そういう人にとっての月収10万円は、同じ一人暮らしをしている月収10万円同士であっても、やっぱり意味が違うはずなのです。その違いは、「溜め」の違いです。そういうふうな意味で、「溜め」という言葉を使っています。

「溜め」の大きさ

お金がいっぱいある人は、たとえば失業してもすぐには生活に困りません。次の仕事を探すまで、そのお金で暮らしていけますから。だけど、お金のない人は仕事を失ったら、すぐに次の仕事を探さないと、自分が食っていけなくなる。すぐに次の仕事を探さなければいけないということは、どういうことかということ、ハローワークには通えないということです。ハローワークには月極めの仕事しかありませんから。月極めの仕事に就く

ということは、最初の給料が入るまで、ひと月か、場合によってはふた月くらいかかってしまうということです。そうなると、ハローワークで紹介される仕事では、生活できませんから、どうするかというと、日払いの仕事を探すようになる。それ以外の選択の余地はない。そうすると、日払いの仕事は月払いの仕事に比べて、総じて条件は悪いですから、そういうところに流し込まれていくということになります。それも同じ失業というトラブルです。同じ失業というトラブルが起こっても、やっぱり「溜め」のある人とない人では、受けるダメージが変わってくる。正規雇用の人だったら、風邪ひいて一週間休んでも、八日目に会社に行ったら、会社はちゃんと待っていてくれて、自分の席はあるわけです。同僚の人は大変だったねとか、慰めてくれるかもしれない。だけど、不安定な状態で働いている人は、一週間も休んだら、もう仕事はなくなっているかもしれない。そのようにして、同じ風邪をひいて一週間寝込むというトラブルに見舞われても、ダメージが違う。それは何に起因しているかというと、「溜め」の大きさに起因していると考えられます。

私は割と「溜め」が大きかったと思います。父親は、日本経済新聞社というところの記者をやっていました。もう9年前に亡くなりましたが。母親は、もう引退していますが小学校の先生、公務員でした。母親は、たぶん勉強のさせ方が上手かったのだと思うのだけれど、私は気付いたら、漢字の練習とかが好きになっていました。上手くのせられたのですね。なので、勉強がすごく苦痛だと思ったことがない。結構スイスイやれたわけです。成績も伸びました。伸びると楽しいのでまたやる。だけどそれは、じゃあ、1から10までオレの努力なのかというと、私の「溜

め」です。こういうものが影響している。だけど、私がこの自分の「溜め」を気付くようになったのは、野宿の人たちと付き合うようになってからでした。それまで、そういうことは考えたこともなかった。

「溜め」がない——社会の現状

野宿の人たちに限りませんが、生活ができなくなって困って、相談に来る人が今、大量にいます。私たちこの近くで「もやい」という団体を運営していますが、相談日になるとだいたい50人ぐらいの人が、「今日明日食べません」と言ってきます。電話は一日100本ぐらいかかってきます。つながりません。午後2時とか3時に取ったら、朝からずっとかけ続けてようやくつながったと言います。そういう人たちがたくさんいます。私たちの団体だけではなくて、たとえば、「命の電話」という自殺を思いとどまってもらうためのボランティア団体がやっている電話、ホットラインがあります。そういうところも電話がなかなかつながらない。非正規の人たちの労働組合にも、ジャンジャン電話がかかってくる。なかなか電話はつながりません。

社会全体が今、そういう状況です。そうなってくると、その人たちを見ていて思うのは、「別に自分と違う人間じゃないよな」ということがわかるのです。確かに私はそれなりに努力してきましたけれども、それなりに努力している人なんて、いくらでもいるわけです。ごまんといる。だけど、結果は全然違うわけです。そういうのを見ていると、条件の違いというのは大きいということをだんだん気付いていくのです。人の「溜め」というのを見ようとするようになると、同時に自分の「溜め」に気付くわけです。自分はいいい環

境にいたなということに気付く。それは貧困問題を考える上で、最初の第一歩だと私は思っています。それがないと、なかなか、あのかわいそうな人たちは本当にかわいそうなのかどうなのかみたいなの、訳のわからない話になって、答えが出てこないのです。かわいそうだと思ったら、パチンコしているらしいじゃないかと。とんでもねえ奴らだみたいな、そういう何かフワフワしたところで話があっち行ったり、こっち行ったり、噂とか評判に左右されたりします。

では、なぜ「溜め」のない人たちが増えているのか。それは社会に「溜め」がないからです。社会の「溜め」が失われて行くと、結果として「溜め」のない人が増えてきます。「溜め」のない人が勝手に生まれるわけではないのです。社会の「溜め」が失われているので、そこからはじき出されて、「溜め」のなくなった人たちが生まれ続けている。

社会の中に溜池をつくる

さっき、「溜め」は、溜池の溜だと言いましたね。溜池って、田んぼなんかのある地域の貯水池です。溜池のある地域と、溜池のない地域を考えてみるといいです。

溜池のある地域は、溜池の周りに田んぼがあって、そういう地域は日照りがたとえば一週間、十日、二週間雨が降らない日が続いてしまっても、作物は枯れません。なぜかというと、溜池から水を引っ張ってこれるからです。その時、個々の稲にとって、一本一本の稲にとって、溜池の水、溜池というのは、その日照りというトラブルから自分を守ってくれるバリアーです。と同時に、そこから水という養分を引っ張ってくるエネルギー源でもあります。そういう意味を持っています。

他方、溜池のない地域を考えると、同じことが起こったらどうなるか。一週間、十日、二週間と日照りが続けば、溜池がなければ、水が干上がって、稲は枯れていきます。では、その時、どうするか。その枯れて行く稲に、萎れていく稲に向かって、「頑張れ」、「根性出せ」、「死ぬ気なら枯れるわけないんだ」というふうに言って、稲がピンと立つなら、それで問題が解決すれば、そうすればいい。そういうふうに言い続けられればいい。貧困問題の解決は簡単です。でも実際にはそれでは、稲は立ち上がりません。枯れていきます。なので、それは解決にはならない。では、どうすればいいのか。溜池を作ればいいわけです。溜池を作れば、日照りがあっても稲は枯れない。

では、溜池は誰が作るのか。あれは昔から地域の人たちが共同で作るものだったということになっていました。それぞれの土地を少しずつ分けて、溜池を作った。だから、入会地といわれたりする共有地なのです。

貧困問題に必要なことは、そういうことなのだと思えます。社会の中に溜池を作る。もちろん、その溜池がない地域で、枯れていく稲にも、早い遅いがあります。一週間で枯れ始める稲もあれば、なんとか二週間持ちこたえている稲もある。持ちこたえている稲は、オレは勝ち残ったと思うのかもしれないけど、どんどんその状態が続いていけば、やっぱりその稲も枯れていってしまう。

私はそういう意味で、「厳しい世の中だから、自分はなんとかして生き残ろう」というのが、効果的な解決策だとは思えないのです。正しい、正しくない以前に、効果的だと思えない。水は着々と無くなっていつているわけです。

たとえば、正規雇用が椅子だとすると、

1990年代前半まで椅子は8つありました。当時の非正規比率は2割だった。それが、3割になり、4割になり、今は若年層についていうとほぼ5割です。女性については、2009年で5割を超えました。となると、これだけ頑張っている、これが6割になり、7割になり、つまり椅子が4つになり、3つになり、2つになり、1つになりしていったら、頑張ったって、そう簡単には座れないでしょう。

こういう状態になると、「自分だけはなんとか」という勢いは増していってしまう。競争に拍車がかかってしまう。となると、かろうじて自分はなんとかあったとしても、たとえば子どもはなんともならないかもしれません。もう、その時にはあまりにも座る椅子が少なすぎて。孫もなんともならないかもしれない。そういう方向に世の中が向かってきてしまっている。私は、これはいい方向ではない、変えるべきではないかということを書いてきました。このままみんなが「とにかく自分だけはなんとか生き残ろう」というふうになって、どんどん周りがいなくなって、自分の上か下にしか人がいない、そういう社会をギョングン先鋭化して作っていても、誰か幸せになるのかなという気がするのです。誰も幸せにならないのではないかという気がする。

ですから、もうちょっと真っ当な、自分には仲間がいてそしてその人たちと一緒に生きていける、別に誰かを蹴落とさなくても生きていける、そういう社会にしていけば、自分も楽なのではないかと思うわけです。私はそういうふうにして、活動しているのです。ホームレス問題とか貧困問題とかやっているという、なんか他人のためにやってエライですねって言われたり、そんな金にもならないことやっているから、なんか下心あるのだ

ろうと言われたり、いろんな言われ方をしますが、私は別に他人のためにやっている気持はさっぱり持っていない。これは自分のためにやっているのです。

私は、こういう社会が嫌だからやっているのです。私がこの活動を始めたのは本当に偶然ですけれども、友だちがやっていたので、それを見に行っただのが最初です。偶然ですが、やはり、やり続けていくと、結果的にはハマっちゃったわけですけれども。結構やりきれないものですよ。その、やりきれない気持ちをたくさん持つわけです。たとえば相談に来る人たちはさっき言ったように、生きていけなくなっていたりするわけです。だけど、その人たちは今、生活ができなくなってきていることについて、誰かに対して怒っているのかというと、怒っていません。怒っている人なんかには、滅多に出会わない。殆どの方は、自分を責めています。「オレが悪いからこうなったんだ」って言っています。それはそうなんです。なぜかという、その人もついこの前までは、生活できていたわけです。ついこの前まで生活できていたその時は、自分が生活できているのは、自分がちゃんとやってきたからだと思っていたのです。生活できなくなってしまうヤツらは、ちゃんとやっていないヤツらだというふうに本人が思っていたのです。

「自分を責める」世の中を変えたい —— やっと動き出した政府

私、一昨年に日比谷公園の年越し派遣村をやりました、昨年は、政府としてオリンピックセンターというところで、マスコミ用語でいわゆる公設派遣村っていうのをやりました。今回の年末年始にそこを訪れてきた人の

中には、一昨年あの番組をテレビでみていて、「まあ、大変だね」と、他人事だと思って見ていたという人がたくさんいます。「まさか自分がここに来ることになるとはなあ。ははは」と笑っていました。だけど、自分が生活できている時は、みんなそう思うのです。さっき言ったように、「これは自分の努力の結果である」と思いたいから。その人が生活できなくなってしまうと、その人はどういうふうにその状況を説明できるか。これは自分の努力が足りなかったからこうなったんだっていうふうにしか説明できないですよ。だって、ちゃんとしていれば生活できるはずで、生活できないのはちゃんとしていないからだという一本の尺度しか持っていないと、生活できなくなったら、自分を責めるしか手段はない。それ以外説明できない。そうすると、どれだけ生活に苦しくなって、困っておかしな目に遭っても、自分を責める。なので、私たちのところに相談に来る人は、自分を責めている人たちばかりなのです。

話を聞いていると、明らかにおかしかったりするのです。あんた、その会社の対応は不当だと。あるいは、それはおかしいというようなことがたくさんあるわけです。聞いているこっちの方がカリカリして。だけど、本人は、さっぱりそのようには考えていない。「どんな時代でも生き残っていける人はいますよね」と言われれば、「そりゃ、その通りだ」としか言いようがない。それに比べれば自分の努力が足りなかったというふうに言われれば、それに対して、そうじゃないと反論できる証拠はない。そうやって、みんな自分を傷つける、そういう方向にベクトルが向いてしまう。それを見ているこちらは、やりきれないのです。生活できなくなってしまった人の話を聞いたら、こんなふうに自分を責めてい

て、それが明らかにおかしいのがわからない。原因が他のところにあるのに。それがやりきれないので、そのやりきれない世の中を変えたいと私は思っているわけです。それでずっとやってきました。

結果から言うと、今までそんなに大して変えられていません。ちょこつとは変わったかもしれない。さっき話したように、2006年ぐらいまでは、日本に貧困なんてないはずと言われてきましたから。政府もそう言っていたし、マスコミも取り上げない。一般の人たちは、そんなことどうでもいいし、関心ないと、ずっとそう言われていた。だけど、私たちは、ずっとそういう問題がある、ここに人を見てくれ、この現実を見てくれというふうにやってきました。それが、ようやく認められるようになって、政府も今は、この問題はなんとかしなければということになったので、知恵を貸してくれと言って声がかかってきた。そういう意味では変化はあります。だけど、まだまだ、世の中大きく変わったとは言えない。

自分の「溜め」を自覚する

さっき話した貧困率 15.7%というのは、2007年の数字なのです。2007年の数字だということは、それ以降にサブプライムローン問題が起こって、リーマン・ショックが起こって、派遣切りが起こったということです。これらは全部それ以降の話なのです。ということは、今はもっと悪くなっている。16%は超えて、17%に近付いているかもしれない。そういう状態の中で、それを変えていくというのは、確かに簡単ではありません。だけれども、では自分は一人だけ生き残れるようにしようと思って、資格の学校通って、

それ取ったからといって、大して評価されなかつたりするので、せつかく取っても企業の方は値を付けてくれないということはいくらでもあります。去年、一昨年就職状況を見ていけばわかります。今年の4月に就職した人たちは、とてもとても大変です。その前の年に就職した人たちに比べれば、何倍も大変だったわけです。それが本人たちの努力の結果かという、関係ない。生まれた年が一年違う、ただそれだけなのに。この中には高校卒業するのに、えらく苦勞して授業料払ったり、一生懸命アルバイトをして、なんとか自分で稼いで、卒業した人がいるかもしれませんが、今年からは公立高校の授業料は無償化ということになりました。それは、一年前に生まれたかあとに生まれたかというただの偶然。だけど、そういう波にさらされてしまうわけです。

だとしたら、私は、もう少し仲間のいる社会の方がいい。横に人がいて、一緒に支え合って、生活できなくなるのをとどめられるような社会がいい。たまたま食えなくなったからって、生きていけなくなるというのはおかしいのではないかということ普通に言えるような、そういう社会になった方がいいだろうと思うのです。そのためには、みなさんに自分の「溜め」を自覚してもらいたいというふうに思っています。私は、こういうことを誰も教えてくれなかったので、30過ぎるまで自分の「溜め」に気が付きませんでした。ですから、みなさんはもっと早く気付けば、私よりもっといい人生が送れるはずですよ。それから、自分の「溜め」に気付くということは、他人の「溜め」に気付くということでもあるのです。そうすると、条件の違う人たちに同じことを言っても意味がないということがわかってくる。たとえば「頑張れ、

頑張れ」って言うでしょう。頑張るためには条件がいるのです。頑張れる条件というのがある。その条件を整えずに、どれだけ「頑張れ、頑張れ」って言っても、さっきの枯れていく稲と同じで、枯れていく。その条件を社会的に整えないとだめだということが、自分の「溜め」に気付くことでわかってくる。

社会に還元する

もう一つは、その「溜め」に気付いて、自分はそこそこ持っているなと思ったら、その「溜め」を社会のために使っていただきたいと思えます。なかなか、これが難しいのです。

能力のある人、才能のある人は、高く売れる才能を持っています。高く売れる「溜め」を持っている人は、どうしてもその能力を、それを買うお金のある人にだけに使ってしまう。たとえば、高い技術を持っている画家、あるいはデザイナー、あるいは弁護士、医者、そういう人たちは、それを高い対価を払って買える人のために使う。もしその人たちが、それを高いお金を払って買える人たちだけしか相手にしていなかったら、知識も技術もノウハウも世の中の上でしかグルグル回りません。社会の中に環流していかないわけです。そうすると、お金だけではない、いろんな技術とかノウハウがどんどん上だけに溜まっていて、社会はどんどん二極化していきます。社会の不安も高まります。悲惨なことになります。

だから、「溜め」を持っている人は、それを社会に還元してもらいたい。なぜ「溜め」を持っている人が偉いかというと、それをちゃんと社会に還元するから偉いのです。お金持ちはお金持ちだから偉いのではなく、高い税金を納めるなどを含んで、社会の「溜め」になることをやっている時に、尊敬され

るのです。そういうふうに考えると、大きな企業が「オレたち、法人税下げないと海外行っちゃうけどいいの?」とか言っているのは、なんとなく見苦しい感じがします。品がない感じ。

たとえば、地元の名士といわれる代議士さんが、自分の町でも村でも、都道府県でも国でもいいですが、その人が「オレの所得税下げないと、オレ、他の地域行っちゃうけどいいのか」って選挙民に言ったら、その人信頼されると思いますか。「あの人のために、一票入れよう」という気になりますか。ならないと思います。「なんか、嫌なヤツだ」という感じがしませんか。

企業が社会の一員だということもそういうことです。企業は人をリストラできますけれども、リストラされてもその人は、この社会で生きていかなければならない。日本国は日本国民をリストラできません。自分で「他の国がいい」って行かない限り、「あんたの国籍をはく奪する」ということはできないことです。その人は、この社会で生きていく。だとしたら、リストラにあったような人を、関係ないと放置していても、結果的にはそれは自分たちに返ってくる。

今、お金がないないと言って、いろんな支援をケチっているでしょう。ある研究機関が試算しましたがけれども、みなさんよりちょっと上の就職氷河期世代、その人たちを今のような、あまりしっかきしていない就労支援策で、「本人がもうちょっと頑張ればいいんだ」と言ってお茶を濁していると、将来的には77万人の人が生活保護を受けると報告しています。暮らしていけないからです。その時にかかるお金は19兆円という試算をした研究機関もあります。結局、そうやって私たちに返ってくるのです。

生きやすいルールに変える —— 社会をデザインしていく

ですから、私はみなさんには、最初の話に戻りますが、椅子取りゲームのルールを変えるようなことを考えていただきたい。もうちょっと、こうやった方が多くの人が生きやすいのではないか、みんなが椅子に座れるのではないかと、たとえ椅子の数が減っていても、困る人はでないのではないかと、というような工夫をです。それは社会のデザインです。そういうふうに社会をデザインしていくということがとても大事なことだと、自分一人がいい就職先に就くよりも、はるかに貴重なことだと思っております。

大学3年生とか4年生になると、皆さんは、ものすごい膨大なエネルギーを就職活動に使うことになるのです。先輩たちを見ていけば、すぐわかります。だけど、その膨大なエネルギーの1割でいいから、5%でもいいから、そういうことを考えるのに使っていただきたいと私は願っています。そして、そういう人が増えていかないと、この世の中は、よくなる。今まではそういうことは、考える必要はないのだと、不当に放っておかれ過ぎた。それで、子どもの気持ちがこんなふうになってしまった。なので、みなさんの世代で、直していただきたい。

なかなか新入生に向けるはなむけという感じにはなりません、そういうことを通じて社会はよくなる。それが私の信念です。そういうふうに考えているヤツもいるんだということをごく頭の片隅にでも置いてもらえればと思います。

どうもご清聴ありがとうございます。

(文責・法政大学キャリアデザイン学部
2010年度オリエンテーション委員会)